けた人に肝炎の検査を呼びかけていた。まさか。心臓が高鳴った。次の瞬間、視界に20年前に出産した病院名が飛び込んできた。だが、母から検査を勧められた福田は一笑に付した。高校時代、空手部で活躍し、人一倍体力に自信があっただけに、病気なんて他人事に思えた。ただ、検査だけは受けることにした。母を安心させるために。

2週間後、結果は両親に告げられた。母からの電話に福田は「C型肝炎？　治療すれば治るとならよかたい」と受け流した。それから暫くたった夜、一人暮らしのアパートで、テレビから「C型肝炎」という言葉が聞こえてきた。報道番組のC型肝炎の検証で、アメリカの刑務所が映し出されていた。耳をそばだてた。血液製剤は囚人の売血で作られ、一人でもC型肝炎の感染者がいれば薬全部がウイルスに汚染される。感染を放置すれば、やがて肝硬変、肝癌へと移行し、死に至る――。

高熱、脱毛、激しい痒み 病室で声を殺して泣いた

癌で死ぬ？　画面が頭にチラつき、眠れぬまま夜が明けた。恐怖が先に立ち病院に行く気にはなれなかった。ネットの検索画面と、検証シリーズの続編を無言で見つめる日々が続く。内科を受診したのは、告知から4カ月後。ようやく治療する覚悟ができたのに、肝機能数値がある程度悪化しないと治療は始められないと聞き、焦りが募った。

「彼氏がどうの、学校がつまらん？　そんなことで死にやせん。つまらんことで悩めて幸せやね」

仲のいい友達との会話でも、心の中で毒づいてしまう。そんな自分が許せず、思いついたのが、疲労とストレスで肝機能数値を無理やり悪化させる作戦だった。朝6時から23時までパン屋とパチンコ屋のアルバイトを掛け持ち。母の同情、励ましには、全て食ってかかった。彼氏のことも包み隠さず話してくれた娘の反抗に、母は戸惑った。

「夜中に一人泣いているのを聞くのが辛かった。『どんなにしてでも、家を売ってでも助けてやるからね』って、言えるのはそれだけでした」

アルバイト先のパン屋の店長、加藤喜美子は、週に一度は鼻血を出していた福田を覚えている。小麦粉の大袋を運ぶのを代わろうとしても絶対に甘えず、熱心に質問する福田を「教え甲斐がある。次期店長に」と見込んだが、無茶を始めて2カ月。体は限界だった。

念願のインターフェロン治療が始まった。副作用による高熱。脱毛。首と顔の痒みは想像を絶し、血が出ても掻きむしり、肌はボロボロ。体重は38キロまで落ちた。もう誰にも会いたくない。消灯後の病室で声を殺して泣いた。友達は社会で家庭で、必要とされる存在になっていくのに、私はただ寝て、生きてるだけの役に立たない人間――。

心をも病みかけていた福田を救ったのは、自宅療養中に出合った刺繍だった。母が趣味でやるのを見ていて興味はなかったが、無為に時間が過ぎるのを避けたい一心で、針と糸を手に取った。図面の記号通りに刺してみた。あー、やっぱ、つまらん！　投げ出しかけたところで、ふと思った。

「誰かが考えた図面でやるから、つまらんたい。自分で絵を描いてテキトーに縫ってみようっと」

元来、人真似は嫌い。下絵も、糸の刺し方も、思うがままにやったらハマッた。自分を表現できることにワクワクし、一日中、無心で手を動かした。モチーフの多くは動物。図鑑を見ながらイメージを膨らませ、少しできては母に「見て見て～」と見せにいった。知人の紹介で、母娘の刺繍展をしたところ、作品はあっという間に売り切れた。

治療終了から3カ月。ウイルス検査の結果は、依然陽性だった。裁判の存在を知ったのはちょうどその頃。知人の勧めで出かけたC型肝炎医療講演会に、薬害肝炎九州弁護団の弁護士、古賀克重